

校内研修としての授業研究の方向性

——小・中学校現場の取組の工夫から——

胤 森 裕 暢*

1. はじめに

授業研究は我が国において長い歴史を持ち、今日でも、教師が現場で授業力を向上するための中核的な方法として関心と期待が高い。国も、生涯にわたって「学び続ける教員」を支援する仕組みとして、校内における授業研究の活性化を求めている¹⁾。地元広島市でも、校内研修の柱として授業研究を据える小・中学校は多い。

ただし、これをどのように教師の授業力向上に活かしていくか、すなわち「学校現場を基盤とした教師の学習システム」として確立していくかについては模索が続いている²⁾。この課題に対し、筆者が関与してきた学校では、授業研究を連続的で発展的なものにしていこうとしていた。

この度の研究集会では、これらの取組を紹介させていただき、今後の校内における授業研究のあり方、方向性について考えなおさせて頂くことができた。

そこで以下では、紹介させていただいた特徴ある各校の取組から、新たな授業研究の改善の視点を探っていききたい。そのために、あらためて特徴ある各校での授業研究を紹介し、小・中学校における授業研究の可能性や改善の方策について具体的に考察していく。

2. 各学校現場の取組

筆者がこれまで関与してきた学校では、連続性及び発展性のある授業研究の多様な工夫が行われてきた³⁾。この連続性・発展性のある授業研究とは、日常の授業実践につなげる、あるいは次の授業研究につなげる連続性のある授業研究、各回または年間を通しての授業研究が焦点化、深化し、広がる発展性のある授業研究のことと捉えておきたい⁴⁾。

2.1 連続性のある工夫

例えばA中学校では、昨年度最後の授業研究（2013年1月実施）以降、外部講師（筆者など）を招聘して、これまで目指してきた子ども像と諸調査結果をもとに新年度の研究テーマ案について議論を始めた。3月までには連続性のある研究テーマと、それを実現していくための連続性のある年間計画案（日程や内容）を練り上げ、本年度早々の研修会で、外部講師（筆者）も招聘し、新メンバーを加えた教職員全員で共通認識をしていた。同校では年度をまたいで授業研究を連続させている。また本年度から新たに、主に同じ教科担当の教師たちによるミニ研究協議会が全校での授業研究の間に実施されるようになった。これらは、授業研究を日常の授業実践につなげる、あるいは次の授業研究につなげる連続性を高める工夫となろう。今後、これらの工夫による成果について探っていききたい。

* 広島経済大学経済学部准教授

2.2 発展性のある工夫

B中学校では、多様な調査結果をふまえ、目指す子ども像を明確にし、「協同学習をとり入れた授業づくり」を研究テーマに設定して研究授業を行っている。毎回の授業研究では、この学習指導法をいかに効果的に実施するかに焦点を当て、外部講師（筆者）とともに、子どもの反応を記録、分析し、お互いの指導法の工夫・改善について建設的で具体的な協議が深められていく。発展性のある授業研究を行っているといえよう。また、以前から同一の研究テーマで同中学校区としての授業研究が進められており、同じ視点で小学校と中学校とが相互に授業を観察し、協議会を行っている。広がりのある取組といえよう。その小・中学校合同の授業研究では、2通りの小グループが編成され、各教師は同一の協議題について2回協議（あるグループで1度目の協議の後、別グループで2度目の協議）を行う。また、事前に各校（B中学校と小学校2校）の研究主任が集まり、各校で取組んでいる具体的な指導法の工夫や開発した教材を集約し、そこから外部講師（筆者）も交えて協議題を見だし、実際の協議を深め、実践的な工夫や具体的な教材開発まで行っている。これらはいずれも発展性のある取組といえよう。

2.3 連続性・発展性のある工夫

C中学校ではこれまで、3年間共通の研究テーマ「『確かな学力』の定着をめざす」のもと、年度別のテーマを教師たちが主体的かつ連続的・発展的に設定し、全員参加型の授業研究を年間を通して行ってきた。その成果は研究紀要としてまとめ、年度始めには異動後の新しい教師集団によって共有されてきた。本年度は、広島県の学力向上総合対策事業の指定を得て、新たな研究テーマ「『わかる喜び』『学ぶ楽しさ』を実感できる授業の創造～生徒指導の三機能を生かした指導方法の工夫を通して～」を設定し、

外部講師（県、市教育委員会の指導主事及び筆者）の指導・助言を得ながら広く発展的にを行っている。

同校の授業研究は、各回とも基本的に次のような流れで行われる。事前に、授業者は模擬授業を行い学習指導案を改善しておく。また観察者は研究授業を観察する視点と協議題（いずれも研究テーマに即している）について研究部から説明を受けておく。当日は、観察用と協議用のワークシート、3種類の付箋（よい点、課題点、改善策をそれぞれ記入）を使い全員が授業を観察し、その後の協議を深めていく。この協議会は、進行・案内、議事の記録、録画による記録、会場等準備の各係に分かれた教師たちにより協同的に運営される。例えば進行・案内の係は、主に若手教員が担当し、活発な協議になるよう、事前の授業者との協議や、協議会進行中の外部講師との連携に努める。事後には、全員が今回の授業研究、特に協議会の進め方についてのアンケートと、「授業研究でわかったこと」、「これからの授業で取組みたいこと」、「実際に取り組んだこと」について各教師が年間を通して記入するワークシート（いわばポートフォリオ）を完成させ研究部に提出する。

これらを研究部は、今回の授業研究の成果として通信にまとめ、中学校区の教師たちに配付するのである。

同校の取組には、各回の授業研究を日常の授業実践につなげる連続性と、協議会を焦点化し、その成果を広がりのあるものにする発展性をもつ多様な工夫がある⁵⁾。

中でも特徴的なのは、同校の教師全員が企画・運営し、その成果は授業者だけでなく参加者、すなわち広く中学校区全体のものになっていることである。この授業研究では、研究テーマに即した授業・カリキュラムが、個人的にはなく協同的に開発され続けている。また協議会への参画とその後のワークシート作成等により、

個々の教師が自らの実践を反省し、その後の授業に直ぐに活かしていくようになっている。さらには協議会のあり方、深め方そのものが教師たちによって主体的に改善されている。

このように同校では、連続的・発展的な授業研究が教師集団によって創り続けられていることが特色である。

3. おわりに～より主体的な授業研究へ～

これまで見てきたように、いずれの学校でも、授業研究を個人としてではなく全教師たちの協同的なものとして活性化しようとしている。そこでは、各教師の研究授業を手がかりにして、ともに苦戦する同僚との対話としての協議を行い、自らの実践を反省し、改善していくための様々な工夫があった。

今後、校内研修としての授業研究を分析する視点として、連続性や発展性の他に、いかに教師たちが主体的に取組んでいるかということが加えられるのではないかな。なぜなら、これまで見てきたように、授業研究においては教師がその主体となり得るからである。授業研究は、本来、教師たちが専門性を主体的・自律的に形成していく営みと考えられるからである⁶⁾。

A中学校では、連続的で緊密な小グループでの授業研究によって、またB中学校では、焦点化したテーマを設定し指導法や教材を開発する発展的な授業研究により、さらにC中学校では、単に、研究授業を参観し協議に参加するだけでなく、模擬授業に子ども役として参加したり、自ら進行役になって協議を深めたり、協議会の

あり方そのものを評価し、研究部とともに改善したりしていく連続的で発展的な授業研究が行われており、全教師による主体的な校内の授業研究が創られている。

これまでみてきたように小・中学校現場での取組は進展し続けている。ただし、そのために授業者や研究部、そして全教師の投じる労力は大きい。その授業研究に招聘される者として、筆者はいかに参画していくべきか、集会での発表と本報告を通して、改めて考えさせていただくことができた。このような機会を与えてくださった皆様に感謝申し上げる。

注

- 1) 中央教育審議会「教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」、平成24年8月28日、p. 23、他。
- 2) 日本教育方法学会「第49回大会プログラム」、2013年、p. 12。
- 3) 昨年度までのA中学校とB中学校の取組については、いずれも拙稿「校内授業研究の改善に関する考察」『広島経済大学研究論集』第35巻第4号、2013、で紹介している。またC中学校の昨年度までの取組については、拙稿「小・中学校における授業研究の改善に関する一考察」『広島経済大学研究論集』第35巻第1号、2012。
- 4) 本稿の連続性・発展性のある授業研究についての考え方は、木原俊行「授業研究を基盤とした学校づくり」日本教育方法学会編『日本の授業研究（下巻）』学文社、2009年、他を参考にした。
- 5) C中学校の授業研究のあり方は、広島市教育センター『所報』No. 69、平成25年、でも「瀬野川中スタイルの授業研究の確立！」として特集されている。
- 6) 稲垣忠彦・佐藤 学『授業研究入門』岩波書店、1996年、p. 227、237、242。